

サビエル生誕五百年

藤屋侃士
(下松市幸ヶ丘)

賢治、三島由紀夫など
近代・現代日本文学の
研究一筋に生涯を傾け
(続けていた)と書くつ
もりだつたが、十一月三
十日に突然、帰天され
た。

RYかたつむり大学
という文学講座の講師
として八年二ヶ月、百
回にわたって文学につい
て話してもらった。

たが、これが遺作となつ
た。そして懇願して
ラジオ番組にレギュラー
出演してもらう。その

花巻の受賞式に行つ
た婦人に新刊の話をす
ると、早速買い求めた
と連絡がある。このこと
を佐藤先生に報告する

たが、これが遺作となつ
た。しかし、彼女のエッセイ「白夜に
紡ぐ」などを読むと、志村さんの染色の仕事
の中にドストエフスキイ
が生きていると先生は
言われる。

先生は早稲田大学文
学部を卒業後、二十八
歳の時から故郷のミッ
シヨンスクール、梅光女
学院大学(現・梅光学
院大学)に勤め、六十
年間、梅光とともに、
文学とともに歩まれた。
特に一九七一年から二千
九年間にわたって学長
という責務も果たされ
た。一九九七年、第七
回宮沢賢治賞を受賞さ
れた時、岩手県花巻で
の受賞式に、かたつむり
大学の受講生の婦人の一
人が行つたほどである。

しづらしくして、その
婦人から「佐藤先生か
た講座は人気を集め
た。私の生涯でこれ
ほど感激したことはあ
りません」と電話が入
る。先生は実に誠実な
人だった。

ある講座で、無形文化財保持者で、文化功
労者になっている染色家の志村ふくみさん
の話を聞き、少しばかり「文学の力」に触
れたような気がする。

もう、あの情熱にあ
ふれた話を聞くことは
できない。先生は間違
いなく、文学の聖なる
人だった。心の底からご
冥福を祈りたい。

佐藤先生、突然の帰天

〔身近な聖なる人③〕

聖なる人とは、マザー「身近な聖なる人」を
考へた時、聖職者以外
テレサのような生涯を
神のために捧
げた人だけではない。一
つの物事に対して、生涯
自分の志を貫いて生き
る人にも聖なるものを感じる。

先生だ。十六歳の時、
ドストエフスキイに出
会つて文学に目覚め、そ
の後、夏目漱石、宮沢

生涯現役、九十八歳
になつても毎週一回授業
を担当、亡くなる四日前まで教壇に立ち続け
た。まさに聖なる人であ
つた。

かたつむり大学終了後も、新刊を出される
度に送つて下さった。今
及ぶ大作「文学の力」と
トエフスキイの「罪と罰」
を読み感動する。それ
が染織の仕事に具体的

彼女は佐藤先生と同
じように若い時、ドス
トエフスキイの「罪と罰」
を読み感動する。それ
が染織の仕事に具体的



かたつむり大学で
熱弁をふるう佐藤先生

賢治ほかにふれつづ」を
出版された。この本のこ
とは四百七十話で書い
た。まさに聖なる人であ
つた。

今から二十一年前、
徳山の図書館での公開
講座で初めて出会い、
ローカルにもこんなすご

い先生がおられると驚
いた。そして懇願して
ラジオ番組にレギュラー
出演してもらう。その